日本画家・田村豪湖の人物と作品について

長嶋　圭哉

はじめに

現在の新潟県南魚沼市に生まれた日本画家、田村豪湖（明治６～昭和15）［図1］は、上京して谷文晁の画系に連なる佐竹永湖（天保６～明治42）に入門し、明治後期を中心に数多くの美術展に出品した。大正期には画壇での旧派勢力の退潮に持病の悪化も重なったためか、次第に展覧会出品から遠ざかったが、今日眼にする豪湖作品には大正・昭和期のものも少なくない。

大正５年（1916）に刊行された西村駿次編『越佐大観』（越佐会事務所）では、「第五編　越佐の人物 其一」において近世以前の画人（村山半牧・越後法眼・森蘭斎・白井華陽・関俊山・五條巒僊・本間水雲・五十嵐浚明・五十嵐元敬・五十嵐片原・石川侃斎・片山翠谷・細貝静山・長谷川嵐渓・富取芳斎ら）を紹介した後、明治以降の「第六編　越佐の人物 其二」には画家として小山正太郎（安政４～大正５）と豪湖の２名のみを挙げている。県出身の日本画家としては、文部省美術展覧会（文展）における尾竹三兄弟（越堂・竹坡・国観）の活躍があり、日本美術協会系の津端道彦（明治元～昭和13）の存在も大きかったはずだが、少なくとも本書の読者は、豪湖を県内随一の日本画家のように受け止めたことだろう。

図１　田村豪湖肖像写真（『豪湖画譜』〔明治42年〕掲載）

豪湖の出身地では、後述のように昭和40年代に地元の著名人として評伝がまとめられ、平成８年（1996）には塩沢町立今泉博物館（当時）で、同じく南魚沼出身の日本画家・今井爽邦（明治５～昭和20）との二人展が開催された[1]。しかしこれ以降、目立った顕彰の動きはない。公立美術館等への主要作品の収蔵例は見当たらず、日頃、その実作品に触れる機会は少ない。彼の略歴を知ろうと文献に当たっても、生没年等の事項にさえ異同がみられる状況である。

本稿の目的は、このように基本的情報が未整理のまま記憶の風化が進む県人作家について、その略歴や作品等に関する情報を改めて整理し、広く提供することにある。今回は作品・文献調査のみならず、遺族への聞き取り調査の機会も得ることができた。以下に豪湖の生い立ちから上京後の各種展覧会への出品、東京時代における新潟との接点、唯一の作品集である『豪湖画譜』（明治42年）、落款の変遷、作品の特徴と制作姿勢、主な現存作品の調査結果、後半期の活動等について記述し、末尾に『豪湖画譜』掲載作品一覧を載録する。

１．豪湖の生い立ち（上京まで）

豪湖に関する最も詳しい伝記は、昭和43～46年度に塩沢町立中之島中学校（昭和47年、塩沢町立塩沢中学校に名目統合）の校長を務めた田辺辰雄氏が編纂した小冊子『山高水長』（昭和47年）であろう[2]。これは同校卒業生への配布用に作成されたもので、地元出身の著名人７名の事績がまとめられ、豪湖については、前年に発行された『南魚沼郡誌 続編 下巻』（新潟県南魚沼郡町村会、昭和46年、792～793頁）の記述をさらに詳しくしたものになっている。田辺氏による本文の後に、豪湖の長女である田村田鶴子氏の寄稿「おも

1 展覧会名は「戦前を生きた二人の画家　今井爽邦・田村豪湖展」、会期は平成８年８月６日～９月８日。町内所蔵者の作品を展示し、観覧者数5,723人を記録した。同展については『開館20周年記念誌 博物館へ行ってきました』（財団法人南魚沼市文化スポーツ振興公社、平成23年）及び『公民館報しおざわ縮刷版（４）』（塩沢町公民館、平成12年、初出は平成８年８月の『館報しおざわ』371号）を参照した。鈴木牧之記念館の貝瀬香氏のご教示による。

2 田辺辰雄編『中之島偉人小伝 その三 ―郷土に尽した人々― 山高水長』塩沢町立中之島中学校、昭和47年、12～21頁。南魚沼市図書館で所蔵。

かげの記」が収録される。本稿で触れる豪湖の略歴は基本的に同書に拠り、適宜注釈を加えた。

田村豪湖は明治６年（1873）２月29日、新潟県魚沼郡徳田新田（現在の南魚沼市徳田新田）に、農業を営む田村甚佐久の四男として生まれた[3]。男ばかりの兄弟の末子であり[4]、字は「愿郷」、本名は「代吉」であった[5]。田村家（屋号 佐兵衛）は江戸初期、松平越後守の時代から続く徳田村の庄屋であった。

豪湖は７歳の頃「リュウ」を病み、片足が不自由となった。病名の「リュウ」について、詳細は不明だが、「下肢静脈瘤」のことであろうか。あるいは「癰（よう）」の可能性もあるかも知れない。遺族への聞き取りでは、太腿の裏側に腫瘍が根深く残り、亡くなるまで膿が出続けていたという。足の神経に障碍を来したため、彼は片足を引きずって歩き、杖を離さなかった。後の美術研精会での集合写真にも、杖をつく豪湖の姿が見える。一方、彼は小さいときから手先が器用で、絵を描くことが得意であった。そして、足の病の治療が遅れ、障碍が残ったことが決定的な理由となり、画家を志すようになった。

豪湖は15歳の時、橋本独山（明治２～昭和13）について和漢の書画を学んだ。独山は豪湖の生まれた徳田新田から程近い魚沼郡大木六村（現在の南魚沼市大木六）の出身で、明治18年（1885）京都に出て富岡鉄斎に絵を学び、天龍寺の橋本昌禎（峨山）について得度、明治43年（1910）相国寺派管長となり、昭和８年（1933）まで23年間在職した。なお、豪湖が15歳といえば明治21年（1888）頃になるが、独山はすでに上洛していたはずである。独山の一時的な帰郷に際して豪湖が師事したということなのか[6]、あるいは師事した時期がそもそも異なるのかは判然としない。

次いで17歳の時、明治23年（1890）頃のことであろうか、群馬県利根郡沼田町（現在の沼田市）の南画家青木翠山（天保13～明治29）につき、２年余り修業した。翠山は江戸で福田半香に師事、30歳で片目を失明、明治23年（1890）に内国勧業博覧会、25年（1892）シカゴ万国博覧会に出品・受賞するが、晩年には両目を失明した画家である。因みに、翠山の門人の一人で、後に翠山の養嗣となる青木香葩（生年不詳～明治44）は、小林古径（明治16～昭和32）が幼少期に師事した画家であり、東北日報社員として明治29年（1896）７月の信濃川洪水（横田切れ）に取材した絵画を制作するなど、本県との縁が深い[7]。

図２　青木翠山《十二神社拝殿天井画》龍図（部分）と落款

「おもかげの記」には、翠山への師事に関して、「いちずに絵筆への道に精進を決心した少年は不自由な足で杉並木や灌木の茂る細い坂道を上り下りして沼田へと急いだ」（16頁）と記され、上越線のない当時、豪湖は翠山のいる沼田まで、三国峠を通って徒歩で出向いた。翠山は明治24年（1891）、豪湖の生家から至近距離にある十二神社（南魚沼市仙石）の拝殿格天井に龍図[図2]を描いた[8]。当然、豪湖との縁があってのことと思われる。

---

3 豪湖の生年・出生地・父親の名前については文献により異同がある。生年を明治４年とする文献として、西村駿次編『越佐大観』（越佐会事務所、大正５年、第六編81頁）、三神正僚『新潟県人物誌』（越後会、大正７年、374頁）、牧田利平編『越佐人物誌 中巻』（野島出版、昭和47年、561頁）等があるが、明治６年が正しいことを今回、遺族への聞き取り調査で確認できた。生地名について、「南魚沼郡中の島村」（『越佐大観』、『新潟県人物誌』）、「南魚沼郡塩沢町徳田」（『南魚沼郡誌 続編 下巻』新潟県南魚沼郡町村会、昭和46年、792頁）、「中之島村徳田新田」（『山高水長』、昭和47年、12頁）、「南魚沼郡中之島」（『越佐人物誌 中巻』）、「新潟県魚沼郡中ノ島村一番地」（『帝国絵画名鑑』第４版、帝国絵画協会、大正５年、364頁）等の記述が見られるが、明治６年時点の正しい地名は、本文の通り「新潟県魚沼郡徳田新田」である。また父の名を「田村佐兵衛」としている文献があるが（荒木常能編『越佐書画名鑑』第二版、新潟県美術商組合、平成14年、82頁）、佐兵衛は田村家の屋号であり、父の名は甚佐久である。

4 この点について、遺族への聞き取りでは５人兄弟だったとの話も聞かれた。

5 『越佐書画名鑑』第二版では字を「原郷」と誤記している。『美術画報』10編巻２（明治34年10月）には「通称大吉」と記載されている。

6 南魚沼市図書館が所蔵する『豪湖画譜（復刻）』（平成元年）の「田村豪湖略伝」では「独山が帰郷していたので和漢の書画の手ほどきをうけた」としている。

7 青木香葩による信濃川洪水図については、五百川清編『大河津分水双書 資料編 第一巻 横田切れ』（社団法人北陸建設弘済会、平成13年）を参照。香葩と古径の関係については、同書所収の横山秀樹「青木香葩と小林古径」（68～69頁）を参照。

8 十二神社拝殿の格天井は奥行７面・間口７面で、外周部に作者未詳の水墨・彩色による花鳥画等が配され、中央の奥行５面・横５面に青木翠山が描いた水墨による龍図がある。龍図の左上に落款（明治辛卯秋七月 翠山写、白文方印「青木」、朱文方印「暉」）。二顆とも書き印と思われる。この天井画の調査にあたっては鈴木孝一氏および宮司の細矢祥子氏から協力を得た。

豪湖は、これら２人の師のもとで絵の素養を学んだ後、『山高水長』本文によれば20歳で上京した。満年齢なら明治26年（1893）のことになるが、後述の展覧会出品歴から、前年の明治25年（1892）には既に上京していたと考えられる。日本橋にいた佐竹永湖（天保６～明治42）の門下として５年余り本格的に日本画を修業し、永湖から「湖」の一字を譲られ「豪湖」と号するようになった。永湖は、谷文晁の高弟佐竹永海の嗣子となって南北合派を学んだ画家であり、内国絵画共進会、内国勧業博覧会、日本美術協会等でたびたび受賞し、日本画会で創立以来審査員を務めた。因みに、日本美術協会には「田村双湖」なる画家の出品が散見され、明治28年の秋季美術展覧会出品目録によると、同じ佐竹永湖門、本名は「田村栄造」だが、豪湖との関係は未詳である[9]。

豪湖の雅号について附言すれば、足の障碍に因むと思われる「孤足軒」、また、東京でのその後の住所（本郷区駒込神明町）に因む「有神館」などの別号があった[10]。

２．上京後：各種展覧会への出品、新潟との接点

豪湖の展覧会出品歴に関して、「おもかげの記」では明治28年（1895）の第４回内国勧業博覧会への出品をその最初に挙げている（20頁）。しかし、明治25年（1892）の日本美術協会秋季美術展覧会に「新潟県　田村代吉」名義で《山水図》を、明治27年（1894）の同秋季美術展覧会に「新潟県　佐竹永湖門 田村代吉 号豪湖」名義で《苔径月図》（課題）を出品したことが確認できる[11]。ここでは、上京後にもかかわらず、住所表記が「新潟県」となっていることにも注目しておきたい。第４回内国勧業博覧会に出品した際の名義は「越後国南魚沼郡東中島村　田村代吉号豪湖」であり[12]、明治31年（1898）までの間、豪湖は各美術展の出品者住所を「新潟」または「新潟県」と記している[13]。そして、明治32年（1899）10月の日本美術協会秋季美術展覧会に出品して以降、住所表記が「東京府」に変わる[14]。これは、師・永湖の下での修業期間を終え、ようやく画家として独立したという意識の表れと解すればよいだろうか。

「おもかげの記」（16頁）によれば、豪湖は上京後、不忍池の畔の池之端七軒町に住んだが、明治37年（1904）頃に新潟県三島郡寺泊から妻を迎え、本郷に家を構えたという。このことについて、『研精画誌』23号（明治39年１月）の「会員消息」には「旧臘中某女史と結婚せられたり」（12頁）との記載があり、その正確な結婚時期は明治38年（1905）12月であったことが判明する。東京での住所は、次のような変遷を辿った。明治36年（1903）第５回内国勧業博覧会に出品した際の住所は「日本橋区矢ノ倉町四」である[15]。これは佐竹永湖と同住所と思われ[16]、上京後10年以上にわたり、修業を終えた後もしばらくは師のもとに身を置き続けたということになろうか。前掲の『研精画誌』23号（明治39年１月）には、豪湖結婚の記事とともに「下谷池ノ端七軒町三八　田村豪湖」（会員宿所名簿 正会員の部、14頁）との記載がある。『研精画誌』27号（明治40年１月）の「会員消息」欄には「新築落成駒込神明町七へ転住」（９頁）と記される。明治42年（1909）発行『豪湖画譜』の自跋には「駒込の草堂に於て」とあり、また大正５年（1916）帝国絵画協会発行の『帝国絵画名鑑 現代之部』第４版でも「現に東京市本郷区駒込神明町七番地に住す」（364頁）となっている[17]。この駒込神明町の邸宅が、彼の終の棲家となった。

さて、豪湖による各美術展への出品履歴を改めて整理したい[18]。まず、佐竹永湖一門が拠点とした旧派の「日本美術協会」には、明

---

9 東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 019 日本美術協会 第４巻（明治27年～同29年）』、ゆまに書房、平成13年、340頁。

10 豪湖の別号について、『帝国絵画名鑑』第１版（帝国絵画協会、大正元年）では「別に孤足軒と号す」（283頁）としているが、同著第４版（帝国絵画協会、大正５年）では同じ部分が「其居に名して有神館と称す」（364頁）に変更されている。

11 東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 018 日本美術協会 第３巻（明治25年～同26年）』ゆまに書房、平成13年、245頁。東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 019 日本美術協会 第４巻（明治27年～同29年）』前掲註（９）156頁。

12 東京国立文化財研究所編『内国勧業博覧会美術品出品目録』中央公論美術出版、平成８年、282頁。

13 豪湖が出品者住所を「新潟」「新潟県」と記している展覧会は次の通り。日本青年絵画協会第４回絵画共進会（明治28年）、日本美術協会秋季美術展覧会（同29年）、日本美術協会秋季美術展覧会（同30年）、日本絵画協会第３回絵画共進会（同30年）、日本美術協会秋季美術展覧会（同31年）。日本青年絵画協会および日本絵画協会の出品目録は『日本美術院百年史 一巻上〔図版編〕』（財団法人日本美術院、平成元年）、日本美術協会の出品目録は東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 019・020 日本美術協会 第４・５巻』（ゆまに書房、平成13年）を参照した。

14 東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 日本美術協会 第５巻（明治30年～同33年）』、ゆまに書房、平成13年、307頁。

15 東京国立文化財研究所編『内国勧業博覧会美術品出品目録』前掲註（12）292頁。

16 『日本画会第六回展覧会当選百画 第二輯』（画報社、明治37年）の「日本画会々員人名録（承前）」に掲載される佐竹永湖の住所は「日本橋区矢倉町四」（17頁）である。なお、佐竹永陵の住所も同所となっている。

17 『帝国絵画名鑑』第１版（大正元年）では「現に東京市本郷区駒込神明町六番地に住す」（238頁）となっているが、「七番地」の誤植と思われる。

治25年(1892)から大正７年(1918)にかけて、豪湖による出品が確認できる。

秋季美術展覧会　(明治25年)《山水図》	秋季美術展覧会　(明治27年)《苔径月図(課題)》
秋季美術展覧会　(明治29年)《破堤防禦図》	秋季美術展覧会　(明治30年)《上越清水新道図》
秋季美術展覧会　(明治31年)《渓間遊雉図》褒状二等	秋季美術展覧会　(明治32年)《渡頭月夜図》褒状二等
秋季美術展覧会　(明治33年)《雨後蝉声図》褒状一等	美術展覧会　(明治34年)《耶馬渓旭橋新緑図》三等賞銅牌
第32回美術展覧会 (明治35年)《仲秋虫狩(仲秋虫狩図)》褒状一等	第34回美術展覧会 (明治36年)《初夏新月図》褒状一等
第36回美術展覧会 (明治37年)《鉱泉避暑図》褒状一等	第38回美術展覧会 (明治38年)《霜色燈影山水》褒状二等
第40回美術展覧会 (明治39年)《山村検馬図》三等賞銅牌	第45回美術展覧会 (明治43年)《夏山新晴》三等賞銅牌
第46回美術展覧会 (明治44年)《山瘦水涸(山瘦水涸図)》三等賞銅牌	第48回美術展覧会 (明治45年)《秋渓細雨》三等賞銅牌
第55回美術展覧会 (大正５年)《山宿の夏》銅牌	第58回美術展覧会 (大正７年)《霊山雨後》銅牌

次に、日本美術協会の分派とされた「日本画会」への出品歴は以下のとおりである。

第６回展覧会 (明治36年)《雨中曳舟図》	第７回展覧会 (明治37年)《渓山遊猿》
第８回展覧会 (明治38年)《吹雪群鹿》	第９回展覧会 (明治39年)《闘鶏》
第12回展覧会 (明治42年)《日中》	第13回展覧会 (明治43年)《長閑》
第14回展覧会 (明治44年)《初夏》銅賞	第15回展覧会 (明治45年)《那だれ》銅賞
第17回展覧会 (大正４年)《霜夜》	第18回展覧会 (大正５年)《四季山水》銅賞
第19回展覧会 (大正６年)《蝦夷の六月》銀賞	

日本画会編『第十二回展覧会 当選画集』(画報社、明治42年)には、豪湖の入会(11頁)とともに、明治41年(1908)11月の総会で評議員に選ばれたことが記載され(５頁)、彼はこの後、大正２年、４年、６年、８年の総会でも評議員に選出されている。同会は、大正12年(1923)に革新日本画会として新発足した。これ以降については全ての回の出品目録を確認できていないが、豪湖は第３回展(大正14年)に《供燈夜雨》、第７回展(昭和４年)に《霊湯》を出品している[19]。

この他、旧派系の美術展としては、正派同志会展(明治41年)に《領土の秋》(三等賞)を出品した。明治後期に結成された南画系小団体(日本南画会、日本南宗画会等)への参加の有無は未調査である。大正10年(1921)に結成された「日本南画院」への出品は確認できない。

また、新派系の美術展としては、以下の展覧会に出品している。

日本青年絵画協会第４回絵画共進会	(明治28年)《越州村松摘茶図》三等褒状
日本絵画協会第３回絵画共進会	(明治30年)《夕照帰漁》
第５回日本絵画協会・第１回日本美術院連合絵画共進会	(明治31年)《木曽路早旅》二等褒状
第７回日本絵画協会・第２回日本美術院連合絵画共進会	(明治32年)《樹蔭避暑》二等褒状　《渡頭春雨》《山家秋暮》
日本美術院新潟絵画展覧会	(明治33年)《春暖》《秋月夜》
第９回日本絵画協会・第４回日本美術院連合絵画共進会	(明治33年)《秋風》二等褒状
第14回日本絵画協会・第９回日本美術院連合絵画共進会	(明治36年)《野興》
日本美術院奈良絵画展覧会	(明治36年)《月下鯉魚》《野興》
第６回巽画会展覧会	(明治38年)《春宵閑望》

18 各美術展の出品目録については、以下の文献を参照した。日本美術協会:東京文化財研究所編『近代日本 アート・カタログ・コレクション 016～025 日本美術協会 第１～10巻』(ゆまに書房、平成13年)／日本画会:日本画会編『第一回展覧会当撰百画』『(第二回～第十一回展覧会)当選百画』『(第十二回～第二十二回)展覧会当選画集』(画報社、明治31年～大正９年)／日本青年絵画協会・日本絵画協会:『日本美術院百年史 一巻上〔図版編〕』(財団法人日本美術院、平成元年)／日本絵画協会・日本美術院連合絵画共進会:『日本美術院百年史 二巻上〔図版編〕』(財団法人日本美術院、平成２年)／日本美術院新潟絵画展覧会:「1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開」展図録(新潟県立近代美術館、平成９年)／日本美術院奈良絵画展覧会:『日本美術院百年史 二巻下〔資料編〕』(財団法人日本美術院、平成２年)／美術研精会:『日本美術院百年史 三巻上〔図版編〕』(財団法人日本美術院、平成４年)／文展・東京勧業博覧会:東京文化財研究所編『大正期美術展覧会出品目録』(中央公論美術出版、平成14年)／内国勧業博覧会:東京国立文化財研究所編『内国勧業博覧会美術品出品目録』(中央公論美術出版、平成８年)。なお、『山高水長』本文(12頁)に記される豪湖の出品・受賞歴には不正確な点が多く注意が必要である。「明治三十年の文展出品の『清水街道』の絵が二等になり、これは宮内庁のお買上げとなった」とあるが、これは明治30年の日本美術協会秋季美術展覧会に出品された《上越清水新道図》のことと思われる。なお、同書所収「おもかげの記」の記載(20～21頁)は、全てについて裏付けが取れないものの、比較的誤りが少ないと思われる。

19 日本画会編『第三回日本画会絵画展覧会図録』芸艸堂、大正14年。『革新第七回日本画会出品目録』昭和４年。

さらに、寺崎廣業門下の鳥谷幡山、本多穆堂らを中心に結成された「美術研精会」においては、主要メンバーの一人として年数回開催の研究会（例会とも、のち月次研究会）にたびたび参加し、他の会員とともに研鑽を積んだ[20]。年一回開催の同会展覧会には、以下の計８回出品し、回を重ねるごとに成績を上げている。

第４回（明治38年） 《唐児戯亀》《寒夜赴釣》《海辺の夕暮》《緑蔭蝉声》《雪中狗児》 《孤邨春暁》《朝暾寒雉》《秋霽豊穣》	第５回（明治39年） 《秋のくれ》研精賞状　《雪中孔雀》《春宵》《月宮殿》《香魚》
第６回（明治41年） 《春風》研精賞状　《夕風》《嵐山》《富士》《雪中鷹》	第７回（明治42年） 《初夏の雨》研精三等賞状　《亀》《秋風》《月の前》《月夜》
第８回（明治43年） 《磯に峰》銅章　《秋色》	第９回（明治44年） 《浦の秋》二等賞銀章　《古址の春》
第10回（明治45年） 《静夜・吹颯》二等賞銀章　《千鳥》	第12回（大正２年） 《日盛り》銀賞　《凍嶺》

美術研精会での豪湖の動向は、機関誌『研精画誌』（のち『研精美術』に改題）でたびたび報じられた。明治38年（1905）１月14日、第19回研究会を兼ね新年会が上野花月亭で開催され、豪湖は正会員として出席した。『研精画誌』20号（同年４月）ではその様子を「（前略）会員田村豪湖氏は祝詞を朗読せられ了つて宴会に移れり」（17頁）と伝えており、「本会新年会紀念写真」（18頁）を掲載している。このほか同誌24号（同39年３月）に第25回研究会の集合写真（８頁）、26号（同年９月）に丙午大会懇親会の集合写真が掲載されており、いずれにも豪湖の姿が見える。また、明治41年（1908）４月17日撮影の美術研精会の集合写真[図３]には、豪湖（中列右から２番目）の他、同郷の今井爽邦（最左）、また現在の阿賀野市に生まれた長井一禾（最後列最右、明治２～昭和15）の姿も写っている。

図３　美術研精会集合写真　明治41年４月17日撮影
（『日本美術院百年史 三巻下〔資料編〕』より転載）

美術研精会においては、２回にわたり新潟出張展覧会が開催された。初回は明治35年（1902）11月１日～11月10日に新潟市の美術学舘において、２回目は明治39年（1906）７月４日～８日に長岡市の西願寺、７月19日～25日に新潟市の本覚寺においての開催である。しかし、これらに豪湖が出品したか否かは確認できない。なお『研精画誌』７号（明治35年12月）では、初回の新潟出張展覧会の記事の傍らに「入会者報告」（23頁）が掲載され、賛成員として「田村左兵太君（新潟）」の名前が見えるが、豪湖と関係のある人物であるかは未詳である。

明治40年（1907）開設の「文部省美術展覧会（文展）」には、以下の５回にわたり入選した。第７回展においては日本画第一科、つまり旧派としての出品であった。

第３回（明治42年）《暁靄》褒状	第７回（大正２年）《渓山鎚響》褒状
第９回（大正４年）《暮色》	第10回（大正５年）《しぐれ》
第12回（大正７年）《暖靄》	

国内博覧会としては、第４回内国勧業博覧会（明治28年）に《雨余山野開墾図》、第５回内国勧業博覧会（同36年）に《高士聴流》《樵夫焚落葉》、東京勧業博覧会（同40年）に《行路懐旧》をそれぞれ出品した。また、海外における博覧会として、明治44年（1911）ローマの国立近現代美術館（Galleria Nazionale d'Arte Moderna e Contemporanea）の周辺地区を会場に開催された「羅馬万国美術博覧会

20 美術研精会の活動の概要は『日本美術院百年史 三巻下〔資料編〕』（財団法人日本美術院、平成４年）354～365頁を参照。

(Esposizione Internazionale di Belle Arti in Roma)」に豪湖の《夏山新晴図》[図4]が出品されているが、これは前年(明治43年)の日本美術協会美術展覧会出品作と同一作品と思われる[21]。なお、「羅馬万国美術博覧会」出品作品の一部は翌45年(1912)4月14日～7月15日にアムステルダム市博物館で開催された「和蘭アムステルダム万国美術博覧会」に転送され、ここに豪湖作品も含まれていたようである[22]。

『帝国絵画名鑑』第4版(大正5年)によれば、豪湖の御前揮毫は数回、宮内省・東宮職・皇后宮職の御用品になること17回に及んだという。第32回日本美術協会美術展覧会(明治35年)に出品された《仲秋虫狩図》は皇后宮職御用品に[23]、同第40回美術展覧会(同39年)の《山村検馬図》は宮内省御用品になっている[24]。

本項の最後に、上京後の郷里新潟との接点についてまとめる。後述のように、豪湖は明治32年(1899)10月までの時期に新潟市西堀通四番町(現在の新潟市中央区)の善導寺の天井画制作を行い、次いで明治33年(1900)から翌年にかけて、新潟県西蒲原郡小吉村大字高野宮(現在の新潟市西蒲区高野宮)の若宮八幡神社の天井画制作のため同地に滞在した。また、明治33年10月12～18日、新潟県会議事堂で開催された日本美術院新潟絵画展覧会に2点の作品を出品した。同年、南魚沼郡虫野村(現在の魚沼市虫野)出身の宮里保房(明治14～昭和27)が彼の下に入門し、綾湖(のち静輝)と号した。佐竹永湖から田村豪湖、宮里綾湖へと「湖」の字が継承されたことになる。

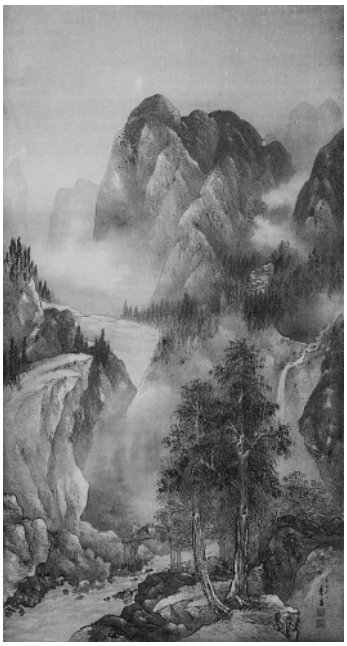


図4　《夏山新晴図》
羅馬万国美術博覧会(明治44年)

翌34年(1901)10月に発行された『美術画報』10編巻2には、「目今郷里に帰り越後国魚沼郡東中島村大字徳田第一戸に在り」との記事がみられるため、新潟市での天井画制作後、徳田新田の生家に滞在したと考えられる。ただし、県内滞在中と思われる同年5月11日～6月30日に開催された日本美術協会美術展覧会(上野公園・日本美術協会列品館)にも、先述のとおり豪湖の出品が確認できる。

さらに『新潟新聞』明治35年(1902)11月15日付2面には「博覧会出品屏風絵」の見出しで以下のような記事が掲載された。翌年3月1日～7月31日の第5回内国勧業博覧会(大阪・天王寺宮)への出品予定作品を郷里で事前公開したとの内容である。33年からの県内滞在がこの年まで続いたのか、あるいは東京との間を行き来したのかは判然としない。

「画家田村豪湖氏の揮毫せる絹地六曲通し画屏風一双は此の程出来上り郷里魚沼に於て一日衆人の縦覧を許せしが意匠は貴賤の別を主として半双は月夜高士聴流図半双は樵夫焚落葉図何も金泥引山水画として見る可きものなりといへり」

図5　『新潟新聞』明治33年9月18日付3面

明治42～43年(1909～10)には、後述のように新潟市西堀通七番町(現在の

21 日本美術協会美術展覧会出品作《夏山新晴》は『美術画報』29編巻8(明治44年3月)に図版掲載されている。羅馬万国美術博覧会出品作品の図版は、農商務省編『伊太利万国博覧会出陳 新古美術品図録』(審美書院、明治44年)を参照した。同博覧会への日本参加については、天貝義教による研究(「明治44年(1911)羅馬万国美術博覧会と平山英三」『秋田公立美術大学研究紀要』3号、平成28年、3～14頁)がある。これによると同博覧会の開会式は明治44年3月27日に挙行されたが、形式的なものに過ぎず、日本特別館は4月22日に開館した。博覧会の会期は同年11月19日までであった。

22 中里一郎編『博覧会協会史』(日本産業協会、大正10年)の「第三章　博覧会協会ニテ取扱タル内外博覧会」「第一節　和蘭アムステルダム万国美術博覧会」の項に「本邦出品ハ純日本画ノミニテ羅馬万国美術博覧会出品中ヨリ転送シタルモノ十六点本邦ヨリ追送セシモノ四十八点ナリ」(58頁)とある。同博覧会の出品目録は未見であるが、「おもかげの記」に「四十二年(ママ)、イタリー万国美術博覧会に出品した『夏山新晴の図』は、続いてオランダの同博覧会にも陳列された由です」(20頁)と記されている。

23 『新潟新聞』明治35年11月29日付3面に「画家田村豪湖氏の名誉」の記事が掲載され、「去月日本赤十字社創立紀念大会の祝典を兼ね開かれたる日本美術大展覧会へ出品せし仝氏筆絹本仲秋虫狩の図は去二十一日皇后陛下の御幸啓の折り御用品として御買上になりたりと毎会如此き栄を得るは氏の名誉と云可し」とある。

24 「おもかげの記」によれば、明治34年(1901)の日本美術協会美術展覧会に出品された《耶馬渓旭橋新緑図》も宮内省御用品となっている。

新潟市中央区）の宗現寺の天井画を手がけている。

また、一時期は『新潟新聞』の挿絵画家として活躍したとの情報があり[25]、同紙明治33年（1900）９月18日付３面には「豪湖」の署名と印章がある秋草の挿絵[図5]が掲載されている。明治35年（1902）11月28日付２面の「美術界彙報」欄には、東京での佐竹永湖の受賞祝賀会や佐竹永陵の小画会開催の記事が見られるが、決して画壇の重大事と思われないこれらの報道には、同門の豪湖からの情報提供があったと考えるほうが自然であろう。『新潟新聞』と豪湖の関わりについては、今後詳細に調査することとしたい。

３．『豪湖画譜』について

豪湖の唯一の作品集として、明治42年（1909）９月に『豪湖画譜』[図6]が刊行された。巻頭の題字（小野湖山、土方久元〔号泰山〕、他１名）に続き、全120点のコロタイプ印刷による作品図版、そして巻末には豪湖の自跋が掲載されている[26]。編輯兼発行者は、弟子の宮里保房（綾湖）である。奥付に記される彼の住所は「東京市本郷区駒込神明町二番地」となっており、豪湖宅のすぐ近くであったことが判る。印刷所は内田写真製版印刷所（東京市牛込区）、大売捌所として東京堂（東京市神田区）と画報社（東京市本郷区）の名が記載される。本稿の末尾に、画譜掲載作品一覧を掲載するので参照されたい。

図６　『豪湖画譜』（明治42年）表紙

掲載作品の一部を紹介するなら、《領土の秋》（№14）は、『美術画報』24編巻９（明治41年12月）にも図版掲載され、同誌によれば正派同志会展（明治41年）出品作であった。《行路懐旧》（№６）は東京勧業博覧会（明治40年）[27]、《秋の夕》（№120）は第５回美術研精会展覧会（明治39年）の出品作である[28]。画譜掲載作品のうち、稿者は《四季の花》（№13）と《楼閣瑞祥》（№61）の２点について現存を確認している。今後、より多くの作品が発掘されることが期待される。

同画譜の掲載作品にはすべて所蔵者名が附記され、新潟県内を中心に、経済界及び医学界等の著名人と推定される名前が数多く見受けられる。医師については、幼少期からの足の治療で得られた人脈の可能性がある。それ以外の数多くの経済人については、どのようなつてで築かれた人脈なのか不明だが、いずれにしても、豪湖の優れた資金調達力を窺わせて興味深い。後で触れるような各地への取材旅行も、彼らに作品を購入させ、幅広く経済的支援を受けたからこそ、可能だったのであろう。これほど多くの著名人が豪湖作品を所蔵した背景としては、何らかの団体による購入の斡旋が行われたのかも知れない。また、作品所蔵者として著名人の名を列挙することで、自らの知名度を向上させる画家の目論見もあったのではないだろうか。

４．落款の変遷について

稿者がこれまで実見できた年記のある現存作品はまだ少なく、詳細な考察は別の機会に譲るが、豪湖の署名の書体は、おおよそ明治・大正・昭和の３期に大別される。ただし、作品と箱書とで書体が異なる事例（後箱の可能性）、また一双屏風の左右隻で書体が異なる事例も見受けられ、落款からの制作年代の推定は慎重に行う必要がある。

明治期の署名は、概して線の細い縦長の書体であり、さらに年代によって、「豪」の６・７画目にあたるわかんむりの湾曲が変化しているようである。明治30年（1897）の**[落款１]**、翌31年（1898）の**[落款２]**ではほとんど湾曲せず、次いで湾曲の少ない**[落款３][落款４]**（ともに制作年不明）がその後に続くと思われる。**[落款５]**（明治37年）では湾曲が増し、**[落款７][落款８]**（ともに明治43年、落款

25『豪湖画譜（復刻）』の「田村豪湖略伝」による。
26『豪湖画譜』に掲載される題字・作品所蔵者名等については、岡村鉄琴「津端道彦の特色と位置づけ」（『津南の生んだ歴史画の真髄 津端道彦集』津端道彦展実行委員会、平成24年、107頁）で言及されており、これを参考にした。画譜の原本を所蔵する公立図書館は、目下、国立国会図書館以外に確認できない。
27 東京府編『東京勧業博覧会美術館出品図録 日本画之部』（審美書院、明治40年）に図版が掲載され、画譜掲載作品と同一であることが確認できる。
28『研精画誌』26号（明治39年９月）の「丙午大会優作第一集」に《秋夕》の題で図版掲載されている。

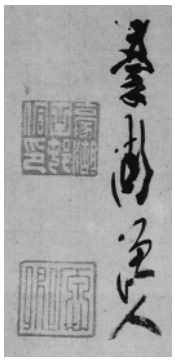
７は天井画のため書き印）では一層湾曲が強くなっている。なお、［落款８］は明治43年（1910）の年記が附された箱書（明治庚戌春日田村豪湖自題）で、そこに納められる軸装作品（年記なし）には**［落款６］**が記される。その湾曲は［落款５］により近く、作品自体はもう少し早い時期に描かれたことが考えられる。

落款１

落款２

落款３

落款４


落款５

落款６

落款７

落款８

次いで大正期落款について述べる。大正元年（1912）10月発行の『帝国絵画名鑑』第１版に見る**［落款９］**では、これまで上に跳ね上がっていた「豪」の２画目がほぼ真一文字になる。全体に隙間の小さい、黒く潰れたような筆跡になり、特に「湖」の「古」「月」の部位の潰れ方が著しい。同名鑑は大正２年（1913）１月に第２版、同２年７月に第３版、同５年（1916）６月に第４版と、版が重ねられた。第２版および第３版は未見であるが、第４版の落款は**［落款10］**に差し替えられている。「豪」の１画目は長く伸びて画の終わりが垂れ下がり、６・７画目のわかんむりの湾曲は一層強まって、円形に近づく。

落款９

落款10

落款11

落款 12

落款13

落款14

落款15

落款16

大正４年（1915）の**［落款11］**では、わかんむりの最後が「豕」に接する。『名鑑』での落款の差し替えが何版からなのか、現段階では不明だが、おそらく［落款10］が［落款11］に先立つのだろう。仮に第４版から［落款10］に変更されたのだとしても、入稿から発行までには時間差があるはずである。なお、大正４年、豪湖が御前揮毫した際の以下のようなエピソードが伝わっている。

「大正四年、今上天皇陛下の尚ほ皇太子殿下に在ませし時、研精画会に行幸あらせらるゝや、君推されて御前に揮毫し、御嘉賞の栄を得、君の落款を見給ひて、其の判読に苦しむを笑ひ給へりと云ふ。蓋し文晁の流を汲めるより来れるか。」[29]

この時大正天皇が眼にし、判読に苦しんだ落款は、［落款11］に近いものだったのだろう。大正６年（1917）の**［落款12］**は、［落款11］からほとんど変化がないが、「豪」のわかんむりを構成する７画目の線が僅かに太くなっている。

昭和期に入ると、さらに変化が加わる。昭和７年（1932）の年記（昭和七壬申春）がある**［落款13］**、同作品の昭和10年（1935）の年記

29 西村駿次編『越佐大観』越佐会事務所、大正５年、81頁。牧田利平編『越佐人物誌 中巻』（野島出版、昭和47年、561頁）では『越佐大観』の記述が引用されている。

（昭和乙亥秋日）が附される箱書**[落款14]**では、全体的に線が太くなり、「豪」のわかんむりは角張った形に変わる。また、「湖」の「古」と「月」が再び分離する。

しかし、昭和９年（1934）の作例では、**[落款15]** **[落款16]**のように、「豪」のわかんむりの形状がさらに異なるものが見受けられる。このように、豪湖晩年の書体の変遷については不明な点が残り、今後さらに作例を集めて検討していく必要があろう。

５．作品の特徴と制作姿勢

現存作品や『豪湖画譜』その他の文献を総合すると、豪湖作品の多くは山水画、次いで花鳥画によって占められ、仏画などの人物画は際立って少ない。

山水画においては、ごつごつと隆起する量塊感のある岩山を中心に据えた縦構図の作品が目立つ。第５回日本絵画協会・第１回日本美術院連合絵画共進会（明治31年）の出品作と思われる《木曽路早旅之図》[図7]、日本美術協会美術展覧会（明治34年）の《耶馬渓旭橋新緑図》[図8]、第45回日本美術協会美術展覧会（明治43年）の《夏山新晴》、第７回文展（大正２年）の《渓山鎚響》、『豪湖画譜』掲載の《秋景山水》、後述する《春景山水の図》などがその代表的なものである。

図７　《木曽路早旅之図》明治31年（『越佐の画人』〔新潟日報事業社出版部、昭和62年〕より転載）

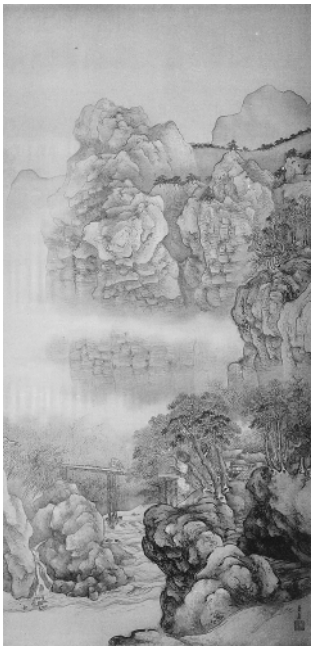


図８　《耶馬渓旭橋新緑図》明治34年 日本美術協会美術展覧会

こうした山水表現は日本美術協会周辺の旧派の画家によって幅広く描かれ、画系において彼に近しい作家、即ち師の佐竹永湖、永湖の義弟にあたる佐竹永邨（弘化２～大正11）、豪湖の兄弟子である佐竹永陵（明治５～昭和12）らにも作例が多い。しかし、永湖一門の作家と比較して浮き彫りとなる豪湖の特徴は、しばしば南画（文人画）の伝統描法を逸脱し、西洋画法を加味した独自の陰影表現を大胆に用いることである。確かに、前掲の《木曽路早旅之図》には披麻皴、《耶馬渓旭橋新緑図》には斧劈皴に近い描法が見られるが、墨の濃淡や彩色を併用することで岩山の量塊感、立体感が強調されており、そこには西洋絵画のモデリングに近い意識さえ感じられる。また、作品によっては、より自由で即興的な墨線、墨のタッチが用いられる場合もあり、これらによって同門の画家の山水表現にはないリアリティを獲得している。

もう一つの豪湖の特徴は、真景図への指向である。中国古典に典拠を求める理想郷や中国の名勝を描き、中国風の点景人物を添えることを常とする旧来の山水表現の中にあって、彼の作品では、日本各地の名勝に取材し、実景から受けた感興を踏まえて山水画として理想化した作品が少なくない。鶴見香織氏は、明治期における南画の変革を「真景図の励行」「写生の重視」の二つの観点から論じているが、まさに豪湖は、こうした南画の「近代化」の一翼を担ったということが出来るだろう[30]。その中心人物であった小室翠雲（明治７～昭和20）や小坂芝田（明治５～大正６）らは、ちょうど豪湖と同じ世代に属する。

さて、ここで留意しておきたいのは、「木曽路」「耶馬渓」など具体的な地名を冠せずとも、実景を意識した作品があり得る点である。前掲《渓山鎚響》[図9]は、作品名や外見から実景を描いたものとは想像できないが、以下の記述によると、信州への取材旅行に基づく作品であることが判る。

---

30 鶴見香織「近代南画―本展の趣旨と内容―」「自然に遊び、自然に謳う―近代南画展」図録、群馬県立近代美術館、平成11年、85～91頁。

「解説　写生旅行より得たる山静かにして太古に似たるの感ある夏の山中に於て石工の作業せる光景をとり、以て理想的山水画と為したるものなり。

ある年の夏、私は信州の山奥へ旅行した時に、幽静な山奥で石を掘り出す石工の石割る音が、深山の寂寞を破つて聞えて来た時の印象を描いたのがこの図である（後略）」[31]

さらに、同じ文章の中で、自身の制作姿勢について次のように述べている。

「（前略）なるべく雄大な自然に接したいと思つて、旅行して直接に其の気分を汲み取る事にして居る、耶馬渓などにも行つて自然に親しんで画想を練つて居る（中略）私が筆を執るに際して最も苦しむのは色彩で山水を描くにしても、その実景をどんなにしたら、描写し得るであらうかと云ふ事に悩まされることが多いのである。」[32]

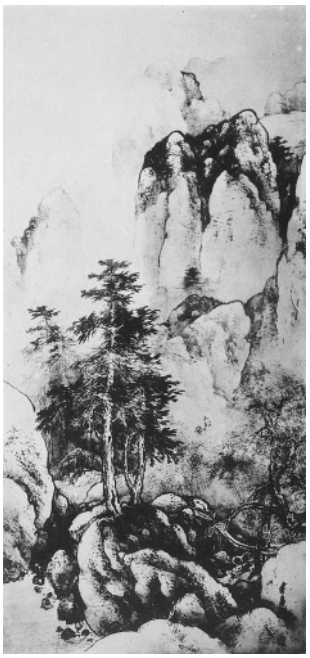


図9　《渓山鎚響》大正２年
第７回文展

片足に障碍を抱えながらも各地を旺盛に取材旅行し、それを作品に結実させることが、いわば、彼のライフワークであった。豪湖が何時何処に足を運んだかの記録は見当たらないが、彼の制作活動について『研精画誌』22号（明治38年９月）では「好んで山水を描き名山大川を跋渉して大いに得る所あり」と紹介されている。《越州村松摘茶図》（明治28年）、《破堤防禦図》（同29年）、《上越清水新道図》（同30年）、《那だれ》（同45年）[図10]などの画題には、風土記的、地誌学的アプローチともいうべきものが感じられよう。

図10　《那だれ》明治45年　第15回日本画会展覧会

一方、《秋の夕》（明治39年）[図11]や《行路懐旧》（明治40年）[図12]などは、何気ない風景をスケッチ風に捉えたもので、その画題の選び方や素描的な筆致を残した樹木の幹や山肌の描き方には、明治30年代の日本画に幅広く表れた自然主義的・写生的傾向、つまり无声会の周辺の画家や西洋体験を経た竹内栖鳳（元治元～昭和17）などの影響も感じられる。

そして豪湖は、外国風景を描いたと思しき作品も残している。『豪湖画譜』に掲載される六曲一隻屏風《北米の野》[図13]には、雪を冠したように見受けられる険しい山脈が描かれ、題名からすれば北米大陸のロッキー山脈あたりを描いたものであろうか。山本春挙（明治４～昭和８）には、セントルイス万国博覧会（明治37年）の視察旅行の成果として《ロッキー山の雪》（明治38年頃、髙島屋史料館蔵）と題する風景画があり、豪湖作品との関連性を窺わせる。ただし、同博覧会への豪湖自身の出品は確認できない[33]。一方、正派同志会展（明治41年）の《領土の秋》[図14]には、南方の椰子の密林が描かれる。これらに関して、豪湖による海外旅行の手がかりは今

図11　《秋の夕》明治39年
第５回美術研精会
展覧会

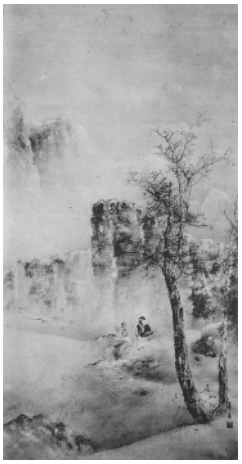


図12　《行路懐旧》
明治40年
東京勧業博覧会

31「二五〇　第七回文展褒状　渓山鎚響　田村豪湖画伯」吉岡班嶺編『帝国絵画宝典 本文之部』帝国絵画協会、大正７年、293頁。作品図版は『同　作品之部』（帝国絵画協会、大正７年、250頁）に掲載。
32「二五〇　第七回文展褒状　渓山鎚響　田村豪湖画伯」前掲註（31）293頁。
33 農商務省『聖路易万国博覧会本邦賛同事業報告 第二編』明治38年。小倉良編『聖路易万国博覧会日本出品協会報告』農商務省内 聖路易万国博覧会日本出品協会、明治39年。

のところつかめておらず、何らかの資料を基にした可能性もあり得るだろう。

さて、ここまで明治期の作例を中心に論じたが、大正期には作風が展開していく。文展出品作の《暮色》(大正４年)[図15]、《しぐれ》(同５年)、日本画会の《四季山水》(同５年)[図16]などでは、全体に筆致が柔和なものになり、草木の葉を細かな墨線の集積や点描で描く装飾的な画面に変化している。これは後述の六曲一双屏風《漁村之春景図》にも共通する。

また、日本美術協会出品作の《山宿の夏》(同５年)や文展の《暖靄》(大正７年)[図17]には、明治期作品にみる峻厳な岩山でなく、日本的、やまと絵的ともいえる丸みを帯びた山並みが描かれる。《暖靄》については絵葉書のカラー図版を見ることができるが、咲き誇る木々の花の薄紅色、山肌の緑青、遠くの山脈の緑青など、画面全体にわたって濃密な彩色が施されていることがわかる。大正期の作品で示されたこのような装飾的傾向については、豪湖に本来的に備わっていた南画的素養が発揮されたというよりも、ほぼ同時期に展開された「新南画」と呼ばれる傾向、つまり再興日本美術院の今村紫紅(明治13～大正５)や速水御舟(明治27～大正10)、あるいは大正７年(1918)に国画創作協会を結成することになる土田麦僊(明治20～昭和11)や小野竹喬(明治22～昭和54)らの作品に触発された可能性も考えられよう。

先に引用した《渓山鎚響》に関する文章(大正７年)のなかで、彼は「新派と旧派との中庸を歩いて行かう」とも述べていた[34]。明治42年(1909)に佐竹永湖が没し、後ろ楯を失ったことが背景にあり、大正期の豪湖は、新旧の派閥に囚われない新しい風景表現の開拓によって画壇内での活路を見出そうとしていたのではないだろうか。

大正８年(1919)10月発行の『美術之日本』には、豪湖の談話に基づく「絵画と個性及び時代思想」が掲載されている。そこでは「現代の作家の中には徒らに古式、古流派を伝習的に墨守して、時代思想や時世の文化に毫も頓着せず、没個性的、時代と没交渉的に殆ど古画の復習に均しき

図13　《北米の野》明治42年以前

図14　《領土の秋》明治41年　正派同志会展

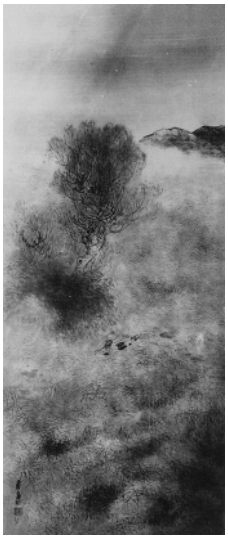


図16　《四季山水》大正５年　第18回日本画会展覧会

図15　《暮色》大正４年　第９回文展

図17　《暖靄》大正７年　第12回文展

34「二五〇　第七回文展褒状　渓山鎚響　田村豪湖画伯」前掲註(31)293頁。

絵画を作つて居る者がある。之れは決して芸術に忠実なるものとは言へない。」と、むしろ守旧的な創作姿勢に対して手厳しい批判を加えている。その上で、自身の信念について次のように述べている。

「故に画家が一個の作品をつくるとしても、それが何時の時代の美術品か、又それが如何なる人に依つて作り上げられたかゞ、若し将来斯道鑑賞家に明らかに窺知し得ないやうな生命のない絵画であるとすれば、現代美術品として価値は更になく、又その作家は全くその時代の高等遊民たるに過ぎないのである。即ちこの見地よりして画家は須らく現代の思想文化を会得し、自己の個性より出でたる生々たる気分感想を移入して描き行くべきである。それが画家としての義務であり同時に生命であると信ずる。（中略）此上にも私は旅行や詩歌によつて自己の修養に力め、能く時代思想を理解し、宇宙人生を解釈し美化して行きたいと思ふ。」[35]

芸術表現における個性や時代性の重要性を説いた豪湖の談話は、東西画壇で在野団体が勃興した大正期の美術思潮を肌身で感じながら発せられたものであろう。もしも後述するような持病の悪化がなければ、彼の芸術にはこれ以降、さらなる展開がありえたのかもしれない。

６．主な現存作品について

■《四季花聚合（四季の花）》明治37年（1904）［図18］

左上に落款（四季花聚合 明治甲辰首春寫 豪湖漁人、白文方印「豪湖田邨侗印」、朱文方印「愿郷」）。『豪湖画譜』（明治42年）に《四季の花》として掲載される。

画面中央に花籠を置き、ハクモクレン、ボタン、フジを生ける。その周囲に多種の花々（スイセン、ウメ、ツバキ、シュンラン、ハス、キク、タンポポ、アジサイ、ケシ、オダマキ、ナデシコ、ユリ、ケイトウ、オミナエシ、アサガオ、シュウカイドウ、タチアオイ、ハギ、ツユクサなど）を散りばめ、画面右から左にかけて、季節が春から夏、秋へと移り変わるような配置になっている。

江戸後期から明治期にかけて描かれた花卉図について、太田彩氏は大きく分けて次の三系統があったと論じている。第一に、室町時代に中国から渡来した花卉図（籠に数種類の花をシンプルに飾った図）に影響されながら、柳沢淇園（元禄16～宝暦８）の頃から描かれ始めた四季の花々を一堂に花籠や花瓶に挿し飾る、文人画家を中心に描かれた系統のもの、第二に、季節感を大切にしながら様々な花を籠等にあしらう花車図や活花図のような狩野派らが描いた系統のもの、第三に、18世紀に渡来したオランダ静物画の影響を受けたと考えられる司馬江漢（延享４～文政元）ら洋風画家による百花図、である。そして、これらが混在しながら新たな図様が生み出されていった[36]。豪湖にとっての派祖、谷文晁にはオランダ画家ファン・ロイエンによる花鳥図の模写（神戸市立博物館蔵）もある。豪湖による本作は、文人画家による伝統的画

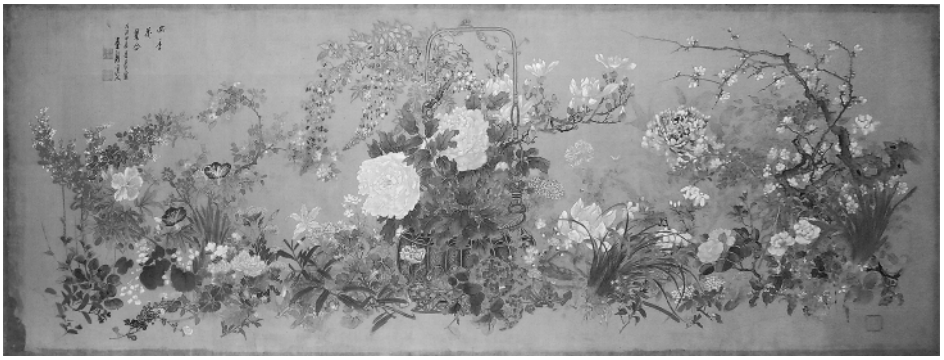


図18 《四季花聚合（四季の花）》明治37年　絹本彩色　額装　90.0×240.0cm　個人蔵

35 田村豪湖「絵画と個性及び時代思想」『美術之日本』11巻10号、大正８年10月、７頁。
36「国の花、華やぐ」展図録、宮内庁三の丸尚蔵館、平成21年、85頁。

題を意識しながら洋風画的な陰影表現をも加味したものとなっており、横長の画面には、田能村直入（文化11～明治40）による巻子《百花》（明治２年、山種美術館蔵）のような植物図巻的な趣向も感じられる。

図19　《春景山水の図》明治43年以前
絹本彩色　軸装　167.0×84.0cm
個人蔵

■《春景山水の図》明治43年（1910）以前［図19］

画面右下に落款（豪湖、白文方印「豪湖田邨侗印」、朱文方印「愿郷」）。箱書に「明治庚戌春日 田村豪湖自題」とあるが、作品と箱書の書体が微妙に異なり、制作年代は明治庚戌、つまり明治43年（1910）よりも早いものと考えられる。

画面右方に屹立する岩山から一条の滝が流れ落ち、画面下の橋が架かる渓流へと続く。岩山の中腹に家屋が見え、その周囲や岩山のいたるところで梅が咲き誇る。この岩山の背後にはより険しい山塊が控え、さらに遠方の雪山へと視線が誘われる。先述のとおり、こうした縦構図の山岳図には多数の類例がある。松樹は南画的な伝統描法に則り、近景の岩は斧劈皴に近い描法で捉えられているが、荒々しい筆捌きによる墨線と陰鬱な色彩によって生まれるその重厚な存在感は、やはり豪湖一流のものである。細かく隆起した中景の岩山の造形が特徴的であり、薄墨や色彩を水彩画のように塗り重ねて細かな陰影を作り出している。

■《宗現寺本堂天井画》明治42～3年（1909～10）［図20、21］

豪湖は新潟市周辺で複数の天井画制作を行っている。まず、明治32年（1899）10月以前の時期に、新潟市西堀通四番町（現在の新潟市中央区）の善導寺本堂に龍図（焼失）を描いた。「百八十尺ノ大龍」との記録があり、正確な画寸は不明ながらかなり大規模な作品だったことが推察される[37]。

次いで明治33年（1900）９月、新潟県西蒲原郡小吉村大字高野宮（現在の新潟市西蒲区高野宮）の若宮八幡神社の社殿が再建されるに際して、彼はこの地の有力者で衆議院議員を務めた山田平太郎の邸宅に滞在し、拝殿の天井画を制作した。この天井画は現存しており、格間の中央部に龍図、その周囲の格間に花鳥図等が配されている[38]。龍図には「明治辛丑晩春 田村豪湖謹写」と年記・署名が記され、明治34年（1901）晩春にこれらの天井画が完成したことが分かる。高野宮は新潟市中央部から20km以上離れた農村地帯であり、いかなる経緯で豪湖が制作依頼を受けたのかは明らかでない。

さらに明治42年（1909）から翌年にかけて、豪湖は新潟市西堀通七番町（現在の新潟市中央区）の宗現寺本堂に２面の天井画を制作した。この本堂は明治38年（1905）12月に上棟され、「八尺間（はっしゃくけん）」天井に龍図、「大間（だいま）」前天井に達磨図を描いている[39]。

２図とも杉材を用いたと思われる。龍図は、板材の生地を生かして濃い墨で龍の頭や胴体の鱗を描き、一部に薄墨を用いて陰影をつける。眼球や、牙・爪の先端などには胡粉を用いる。また背景全体に墨を刷く。右上に落款（豪湖、朱文方印（書き印）「豪湖」）がある。達磨図では、顔全体に薄く胡粉を、衣服には朱を施す。背景全体に薄墨を刷き、周辺部を濃くしている。達磨図のほうは無款である。

これらの制作の経過は、当時の『新潟新聞』および『読売新聞』で報道された[40]。まず、『新潟新聞』明治42年（1909）11月25日付５面に

---

37 渡邊市太郎『大日本名蹟図誌 第九編 越後国之部 首巻』（光彰舘、明治35年）には善導寺の境内図が掲載され、本堂の傍らに「五十四尺方」と記されている。境内図下の記事には「本堂ノ天井ニハ、青年ノ画伯タル田村豪湖ヲシテ全身ヲ顕ハシタル、百八十尺ノ大龍ヲ画カシム、其ノ眼底ヘ性空（引用註：善導寺第二十五世住職）自ラ筆ヲ執リテ経文ノ一句ヲ細書ス」とあり、「明治卅二年十月刻」との年記が付されている。『新潟県神社寺院仏堂明細帳』（新潟県立図書館・新潟県立文書館が提供する「越後佐渡デジタルライブラリー」で検索可）によれば、この本堂は明治33年（1900）11月4日に再築の旨の届出がなされたが、明治41年（1908）9月４日の新潟大火で焼失した。

38 天井画の制作経緯については中之口村編『文化財誌 村内の堂宇』（中之口村教育委員会、昭和60年、26～31頁）に詳しい。この文献は中澤資裕氏のご教示による。

39 宗現寺本堂天井画の調査は「天井の美術研究会」の一環として令和２年１月29日に実施した。中澤資裕氏（加茂市教育委員会）、中村里那氏（新潟市歴史博物館）、長谷川優子氏、本井晴信氏、及び稿者が参加し、渡辺康文氏（文殊堂）に撮影を依頼した。なお、挿図キャプションに記す画寸は天井画直下の床面での実測値である。

図20　《宗現寺本堂天井画》龍図　板・彩色　353.2×1389.8㎝　撮影：渡辺康文氏（文殊堂）

「田村豪湖画伯の来港」の記事が見える。以下に全文を引用する。

「文晁派の泰斗故佐竹永湖翁の高弟にして本県出身の田村豪湖画伯は往年当市善導寺の天井に雲龍を描きて其非凡なる手腕を顕せしが今回久々にて来港し西堀通七番町宗現寺に滞杖して汎く揮毫の需めに応ずる筈にてこれを機として市内有志の発起にて来る廿七日午後四時より鍋茶屋に於て面識会を催ふす由にて当日は画伯揮毫の絹地幅物扇面色紙短冊を抽籤にて出席者に頒贈すと云ふ」

図21　《宗現寺本堂天井画》達磨図　板・彩色　250.0×510.0㎝
撮影：渡辺康文氏（文殊堂）

この記事から、当時、豪湖が善導寺の天井画制作を通して、既に新潟市周辺で一定の知名度を得ていたことが読み取れる。『新潟新聞』明治43年（1910）１月１日付３面には「謹賀新年　一月元旦　新潟西堀通宗現寺内　田村豪湖」との年賀広告があり、同紙１月８日付２面には「豪湖画伯の大作」の記事が掲載された。これも全文を引用する。

「旧冬以来西堀宗現寺に滞在し揮毫の需に応じ居る田村豪湖画伯は同寺方丈の嘱に依り同本堂廊下の天井（二間の八間）に富士越の龍を、又た本堂合天井（三間の九尺）に面壁の達磨を描く由にて目下構図中なるが此種の大作物は稀有のものなるにより揮毫当日は何人にも随意参観を許すと云ふ」

さらに、『読売新聞』１月25日付５面「よみうり抄」には以下のような画家の動静が記され、天井画の完成が近いことが窺える。

「田村豪湖氏は目下新潟にあり同地宗現寺本堂外陣八間全面に雲龍の揮毫を依頼され昨今執筆中なり右終了次第信州諏訪湖を経て帰京すべしと」

足に障碍を抱えながらこのような大規模な天井画を制作するには、当然、多くの困難が伴ったはずである。しかしそれ故にこそ、衆目を集めた部分もあったに違いない。なお『山高水長』には、この天井画制作に際して、料亭に「にせ豪湖」が現れたとの逸話も紹介

40 これらの新聞記事については中澤資裕氏からご教示を受けた。

されているが、真偽の程は明らかでない。

■《漁村之春景図》大正期[図22]

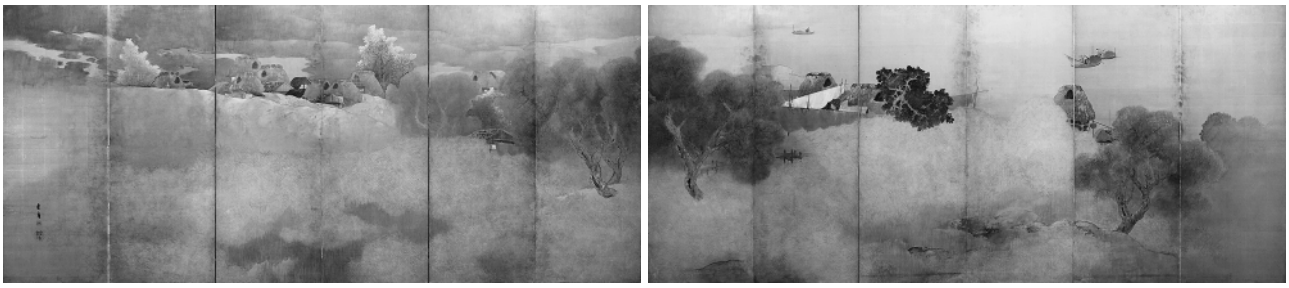


図22　《漁村之春景図》大正期　絹本彩色　六曲一双屏風　各164.0×374.0cm　個人蔵

左隻左下に落款(豪湖、朱文方印「田邨」、朱文印「豪湖画印」)。裏箔を押した絹本に描き、漁船の浮かぶ水面はこの裏箔地を生かしている。近景の樹木の葉には墨と緑青の短い線を重ねて点描に近い表現が試みられ、樹下に広がる草原は、葉の輪郭線を墨で引き、この墨線が透けるように全体に白緑を薄く刷いて表現している。左隻から右隻にかけて伸びる雲には白群を用いる。金と岩絵具の色彩対比を意図した作品といえよう。

点描風の表現や署名の筆跡から、大正期に制作されたと考えられる。取材地は不明だが、水辺の景色を描いた屏風という点で、茨城県潮来に取材した風景画《水郷の夏》と関係があるのかも知れない。先に触れた「絵画と個性及び時代思想」(大正８年)のなかで、豪湖は《水郷の夏》の制作について次のように述べている。

「近々私は『水郷の夏』と云ふ画題にして、彼の唄にある『潮来出島の真菰の中であやめ咲くとはしほらしい』と云ふあれを描いて見たいと思つて居る。其の準備にその潮来、霞ケ浦あたりの水郷の初夏の気分を味はうとして、私は本年わざ々々その真景を見に行つたが、その春も既に老いて初夏に移り行くその気分、その色彩の美、一種の神秘的の感、実に形容の言葉を見出すことが出来ない位で、之を描くのには随分骨が折れる。」[41]

これに関連して、田村田鶴子氏の「おもかげの記」にも「潮来の葦を主題としました六曲屏風は、自分で快心の作だと喜んでおりました」(17頁)、「大正になりましてから潮来の湖の葦を描きました、『水郷の夏』や『桃咲く丘』では画風が大変明るさをましたようです」(20頁)などの記述がある。《水郷の夏》《桃咲く丘》とも展覧会への出品は確認できず、絵柄についても不明である。

■《遠雷・旭日老松》大正期・昭和７年(1932)[図23]

図23　《遠雷・旭日老松》大正期・昭和７年　絹本彩色・墨画　六曲一双屏風　個人蔵

41「絵画と個性及び時代思想」前掲註(35)７頁。

《遠雷》は画面右下に落款（豪湖、白文方印「豪湖漁史」、朱文方印「田邨」）、《旭日老松》は画面左下に落款（昭和七壬申春 有神館 豪湖、朱文方印「豪湖□」、朱文方印「（不明）」）。箱書に「遠雷 旭日老松 壱双 昭和乙亥秋日 豪湖記」とあるが、《遠雷》に記される署名は大正期の特徴を示し、一方の《旭日老松》には昭和７年（1932）の年記があるため、本来別々に制作されたものが昭和乙亥、つまり昭和10年（1935）に一双屏風としてまとめられたのであろう。

《遠雷》は山村風景を描いた彩色画で、広葉樹は僅かに色づいた葉を茂らせ、柿の木は橙色の実をつけており、９月から10月くらいの季節であろうか。近景の樹木に緑青、遠景の山に群青を用い、色彩豊かな画面である。一方の《老松》は水墨画である。同趣の松図で、昭和期の署名がある軸装作品が現存しており、晩年の豪湖が得意にした画題と考えられる。

７．後半期の活動

大正７年（1918）を最後に、豪湖の日本美術協会および官展（翌８年から帝展に改組）への出品は途絶えている。この年から翌８年（1919）頃にかけて、彼は脚の手術を受け、その結果は思わしくなかったという。

大正９年（1920）と翌10年（1921）の日本美術協会展覧会（第62･63回）で委員を務めたものの豪湖自身の出品については確認できず[42]、同10年頃には病を得て、数年間絵筆から遠ざかった。田村家の菩提寺関興寺（南魚沼市上野）は臨済宗円覚寺派の寺院であったが、豪湖はこの頃から日蓮宗の信仰に入った。「おもかげの記」によれば、日蓮宗の寺院に天井画を描いたこともあったが[43]、病気恢復後の大作は２、３点に留まったという。これ以降の展覧会出品は、大正14年（1925）と昭和４年（1929）の革新日本画会への出品が確認できるのみである。

このように大正後期から昭和期にかけては、必ずしも作品制作に専念できなかったようだが、大正末年には、青木翠山の門弟有志が翠山の墓所である群馬県沼田市の平等寺（真宗大谷派）境内に顕彰碑「画伯翠山翁碑」[図24]を建て、豪湖もそこに名を連ねた[44]。昭和４年（1929）には豪湖の後援会ができ、発起者には県内著名人が名を連ね、賛助者には大竹貫一（安政７～昭和19）、田辺熊一（明治７～昭和15）などの政治家や、豪湖がかつて師事した相国寺派管長の橋本独山（明治２～昭和13）の名もあったという。また、長徳寺義士堂（新潟県新発田市、真宗大谷派）や、永平寺傘松閣（福井県吉田郡永平寺町、曹洞宗大本山）などの格天井画の制作に参加したのもこの頃である[45]。

図24　画伯翠山翁碑
平等寺（群馬県沼田市）

42 東京文化財研究所編『近代日本 アート･カタログ･コレクション 025 日本美術協会 第10巻（大正８年～昭和17年）』ゆまに書房、平成13年、19･32頁。

43 「おもかげの記」では「法華寺の天井に画竜をのこしたりいたしました」（19頁）、また同寄稿の別の個所で「日蓮宗の寺の山門にも同様筆を染めました」（20頁）とある。後述のように、豪湖は晩年、千葉県市川市の法華経寺（日蓮宗大本山）に参講しており、この龍図が描かれたのも同寺の可能性がある。しかし今回、法華経寺に問い合わせた結果、天井画の存在は確認できなかった。

44 「画伯翠山翁碑」は群馬県沼田市西原新町131番地の平等寺参道脇に現存する。表面の題字は陸軍軍医で日本赤十字社社長などを務めた従二位勲一等子爵石黒忠悳（弘化２～昭和16）による。裏面には翠山の略歴とともに「特別賛助員」８名（小室翠雲、岸波柳渓、青柳琴僊、生方清逸、林耕逸、角田静竹、勝野月湖、田村豪湖）及び地元を中心とする発起人･発起人惣代の名が刻まれている。碑に建立年の記載はない。建立に先立って作成された「青木翠山翁建碑主旨」及び大正14年９月に提出された「建碑許可願」が沼田市編『沼田市史 資料編3 近代現代』（平成10年、754～757頁）に収録されている。「青木翠山翁建碑主旨」には特別賛助員として勝野月湖及び田村豪湖を除く６名の名前のみが記され、月湖及び豪湖の２名は後に加わったと考えられる。清水源三郎編著『北毛乃史跡と伝説』（北毛月報社、昭和13年）等の文献では建立年を大正14年としているが、翌15年に建立されたとする関係者の記録もある。翠山は幼少期、平等寺第二十一世住職井上惠純（号 無蓋）に絵の初歩を学んだ。青木翠山及び画伯翠山翁碑については、平等寺住職の井上彰雄氏からご教示を受けた。

45 長徳寺義士堂の天井に施された全60枚の書画を収録した冨沢信明氏（新潟大学名誉教授）監修による『GISHI-DO 義士堂天壁書画』（松霊山長徳寺、平成28年）が刊行されている。同書によると義士堂の建設は昭和３年（1928）３月４日に決定し、翌４年（1929）４月３日に落成した。豪湖による桜に徳利図には年記はないが、他の作者の天井画に昭和３年あるいは４年の年記が散見されることから、豪湖画も同時期のものと思われる。なお義士堂の天井画には豪湖弟子の宮里静輝も参加している。また、『永平寺傘松閣天井絵』（永平寺、昭和58年）によれば、傘松閣は一般参詣者や全国の檀信徒を展待する大広間として同５年（1930）に改築され、小室翠雲らの尽力により当時の日本画家144人による230枚の花鳥画が格天井に嵌め込まれた。豪湖の描く秋草図には「昭和庚午春」（庚午＝昭和５年）との年記がある。因みに、豪湖の生家に近い南魚沼市舞子の石上神社にも、かつて格天井画が掲げられていたが、ここに豪湖作品は含まれない。皇紀二千六百年記念事業として社殿が大増改築された際、当時中之島村長を務めた鈴木謙治が主導し、地元出身の日本画家今井爽邦の仲介により、石井柏亭、横山大観、野田九浦、池上秀畝ら画壇の重鎮による絵画、荒木貞夫、徳富蘇峰、近衛文麿、米内光政、小磯国昭、林銑十郎、板垣征四郎、諸橋止軒（轍次）、山本五十六ら政治家･軍人･文化人等による書、69点が集められ、幣殿格天井に掲げられた。これらは、昭和54年の台風被害のため、敷地内に新設した宝物殿に移され、今日に至る。

豪湖は千葉県市川市の法華経寺（日蓮宗大本山）への参講中にたおれ[46]、昭和15年（1940）３月８日、67歳で死去した[47]。『日本美術年鑑 昭和十五年版』には死去時の住所が「千葉県市川市中山門前四一三」（98頁）と記載されるが、駒込神明町の自宅を引き払っていた訳ではないようだ。戒名は「本覚院豪湖日徳居士」であった。晩年に撮影された豪湖の写真[図25]が、遺族のもとに残されている。

今回、豪湖の長兄の曾孫にあたる田村忠雄氏（南魚沼市徳田新田在住、昭和２年生まれ）に対して聞き取り調査を行うことができた。その結果を以下に要約する。

図25　晩年の田村豪湖（田村忠雄氏 提供）

- 豪湖の兄弟として名前が分かっているのは藤十郎と佐市郎。藤十郎が長男で、忠雄氏の曾祖父。（豪湖のもう一人の親族である平賀憲彦氏によれば、三男は弥吉郎で、平賀氏の曾祖父にあたる）
- 忠雄氏は幼少期に豪湖本人と会っている。豪湖が没した昭和15年（1940）は、小学校卒業の頃であった。
- 豪湖は毎年、初夏の６月頃（田植えが終わった頃）、４、５日から１週間くらいのあいだ帰郷し、生家でも絵を描いていた。
- 上越線の塩沢駅で下車し、当時は道が悪かったこともあり、人力車に乗って帰宅した。
- 六日町の地方紙（未調査）に「豪湖画伯帰郷」の記事が載った。
- 忠雄氏の祖父は、いつもは囲炉裏の横座に座っていたが、叔父にあたる豪湖が来ると、そこを空けて座らせ、自分は嬶座（かかざ）に座っていた。そのような待遇をしていた。豪湖も生家に来ることを楽しみにしていた。
- 帰郷時は、生家の他、菩提寺である上野の関興寺に行って、静かなところで絵を描いた。生家では、忠雄氏ら子供が騒がしかったため。
- 東京の自宅は、東京市本郷区駒込神明町の駒込神明宮（駒込天祖神社）のすぐ前、参道脇にあった。忠雄氏も、子供の時、本郷の豪湖宅に泊まったことがある。
- 師・橋本独山は、近くの大木六集落の出身だが、学校での友人関係にはなかったと思われる。当時の小学校は、舞子と大木六に分かれていた。
- 師・佐竹永湖の名前は、豪湖からよく聞いたが、どのような付き合いがあったかまではわからない。
- 弟子・宮里綾湖は、忠雄氏が小学生の頃、生家にも１、２回来たことがある。伊米ヶ崎の宮司の家の出身である。
- 海外旅行をしたという話は全く聞いたことがない。足が悪かったので、その可能性は低い。

まとめ

今回の調査を通して、豪湖は山水画に主軸を置き、旺盛な取材旅行を通して実景から受けた感興を作品化したこと、また西洋画法を加味した独自の陰影表現を用いて、旧派の画家による南画の近代化の一翼を担ったこと、そして大正期には芸術表現における「個性」を主張して、当時の新動向を意識しながらさらなる画風転換を図ろうとしたことが明らかとなった。また、明治期には中央画壇での活躍を足掛かりに新潟県内でも盛んな制作活動を行い、社寺の天井画を複数描いたこと、また県内を中心とする多くの著名人が

46 『山高水長』では「中山本門寺」と記載している。
47 豪湖の没年については、文献によって誤りが散見される。牧田利平編『越佐人物誌 中巻』（野島出版、昭和47年）には「大正十五年三月八日になくなった。」とある。『新潟県大百科事典 下巻』（新潟日報事業社、昭和52年）には「1946年（昭和21）病死、74歳。」（108頁）とある。『日本美術院百年史 第二巻上〔図版編〕』（財団法人日本美術院、平成２年）の出品作家一覧表には「1873～1946、新潟」（892頁）とある。また死去した日付についても『日本美術年鑑 昭和十六年版』には「三月九日」（92頁）とある。

その作品を所蔵していたことも判明した。郷里の南魚沼よりも新潟市周辺に足跡が多く残る点は意外な発見であった。

今後、豪湖に関してさらなる解明が必要となるのは、美術研精会等、所属した美術団体での活動の詳細や他の会員との繋がり、また新潟県内に滞在しての活動、とりわけ社寺の天井画制作に至る経緯や『新潟新聞』との関わり、いかにして県内財界との人脈を形成したか等の事項であろう。豪湖の県内での活動については、個々の事象が判明したにとどまり、点と点が繋がっていない憾みがある。そして、豪湖の再評価のためには、前半期の充実した大作がさらに見出されていくことが不可欠である。現存作例の調査を進め、落款の変遷に関しても、より詳細な考察を行いたいと考えている。

本稿執筆にあたっては、調査の初期段階で作家親族の平賀憲彦氏および田村忠雄氏から多岐にわたるご教示を受け、そのほか以下の方々にお力添えを賜りました。記して感謝申し上げます。井上彰雄氏(平等寺)、貝瀬香氏(鈴木牧之記念館)、久保田哲夫氏、佐山富榮氏、鈴木孝一氏、大海修一氏(寶林寺)、田村慶一氏、中澤資裕氏(加茂市教育委員会)、中山忠氏、平賀史彦氏、笛田喜代子氏、笛田吉雄氏、細矢祥子氏、堀川浩之氏、宮田日出男氏、本井晴信氏、渡辺康文氏、日本料理 魚長、宗現寺、長徳寺、天井の美術研究会、南魚沼市図書館、南魚沼市立塩沢中学校、南魚沼市立中之島小学校(五十音順)。

(新潟県立万代島美術館　主任学芸員)

【資料】『豪湖画譜』(明治42年)掲載作品一覧

作品名および所蔵者名は同画譜目次に基づく。作品番号は稿者が便宜的に付した。出品展覧会および所蔵者備考は稿者の調査による。所蔵者の略歴等については以下の文献を参照し、web検索も活用した。『人事興信録』各版(『人事興信録』データベース、国立国会図書館デジタルコレクション)、西村駿次編『越佐大観』(越佐会事務所、大正５年)、三神正僚『新潟県人物誌』(越後会、大正７年)、坂井新三郎『越佐名士録』(越佐名士録刊行会、昭和11年)、『越・佐傑人譜 昭和十四年度版』(日本風土民族協会、昭和13年)、牧田利平編『越佐人物誌 上巻・中巻・下巻・補遺編』(野島出版、昭和47・49年)。当然、同姓同名の別人である可能性も残されるため、飽くまで推定として記す。

No.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
1	田子の浦 (六曲屏風)		山田平太郎	文久元年(1861)、越後国蒲原郡六分村(現在の新潟県新潟市西蒲区)に生まれる。衆議院議員を務め、農工銀行の創立に参画、頭取となる。若宮八幡神社(新潟市西蒲区)の再建を主導。明治43年(1910)、中之口川の汽船事故で没。
2	北米の野(仝)		星野　俊次	
3	戯れる猿	日本画会展覧会(明治37年)出品作《渓山遊猿》と構図が類似	日比野雷風	元治元年(1864)、薩摩国(現在の鹿児島県)に生まれる。剣客。神刀流を創始。大正15年(1926)没。
4	秋雨急来		源川　萬吉	明治７年(1874)、蒲原郡三条町(現在の三条市)に生まれる。多額納税者。株式会社三条貯蓄銀行専務取締役、株式会社三条銀行取締役、新潟貯蓄銀行専務取締役、同三条代理店長、三条町会議員、所得税調査委員、三条在郷軍人後援会長、社団法人明訓校団専務理事等を務める。
5	谿間の雉子	日本美術協会秋季美術展覧会(明治31年)出品作《渓間遊雉図》と関連か	杉浦　一郎	
6	行路懐旧	東京勧業博覧会(明治40年)	酒井　文吉	嘉永６年(1853)、越後国魚沼郡田尻村(現在の新潟県魚沼市)に生まれる。実業家。株式会社小出銀行取締役、株式会社堀之内銀行取締役、銀山拓殖株式会社取締役、株式会社小出蠶繭乾燥所、北越殖民株式会社取締役、株式会社小千谷銀行監査役等のほか、郡会議員、県会議員を務め、明訓校の創立を援助。大正３年(1914)没。 ※『豪湖画譜(復刻)』に「並柳」の文字あり。
7	双鶴		青木　荘吉	安政元年(1854)、魚沼郡上一日市村(現在の南魚沼市)に生まれる。実業家・政治家。縮布仲買業のかたわら縮布の研究を行い、のち絹織物製造を企て、魚江製糸会社を創立。県会議員、大沼村長、郡会議員を務める。大正元年(1912)没。

№.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
8	緑蔭	第４回美術研精会展覧会(明治38年)出品作《緑蔭蝉声》と関連か	安田善次郎	〈初代善次郎〉天保９年(1838)、越中国(現在の富山県)に生まれる。実業家。安田財閥の祖。第三国立銀行、安田銀行、日本銀行を設立。東京帝国大学大講堂(安田講堂)、市政会館・日比谷公会堂を寄附。大正10年(1921)暗殺。
9	ぬるむ水		栗山　安平	万延元年(1860)、越後国蒲原郡三条町(現在の新潟県三条市)に生まれる。実業家。メリヤス販売業に励み、メリヤス商同業組合長、株式会社富国銀行監査役を務める。
10	鳴瀑		西脇新次郎	〈八代新次郎〉明治２年(1869)、魚沼郡小千谷町(現在の小千谷市)に生まれる。実業家。縮布及び絹織物を販売する西脇商店株式会社の社長として事業を拡大。株式会社小千谷銀行監査役、株式会社西脇銀行監査役、中野醸造株式会社取締役、越後製紙株式会社監査役を務める。 ※『豪湖画譜(復刻)』に「小千谷」の文字あり。
11	龍頭観音		不動堂荘厳寺	東京都渋谷区の寺院(真言宗室生寺派)か。
12	石瘦水涸	第46回日本美術協会美術展覧会(明治44年)出品作《山瘦水涸(山瘦水涸図)》と関連か	新川　俊蔵	
13	四季の花		竹内右忠治	明治２年(1869)生まれ。三島郡大河津村(現在の長岡市・燕市)の実業家。株式会社地蔵堂銀行取締役を務める。
14	領土の秋	正派同志会展(明治41年)	土肥　慶蔵	慶応２年(1866)、越前府中松原(現在の福井県越前市)に生まれる。医学博士。ドイツ、オーストリア、フランスに留学、東京帝国大学医科大学皮膚科教授を務める。昭和６年(1931)没。
15	巣籠り		若杉喜三郎	元治元年(1864)、越後国蒲原郡五十嵐浜村(現在の新潟県新潟市西区)に生まれる。医師。新潟市に若杉病院を開業、新潟市会議員、同議長、新潟市参事会員、新潟市衛生会会頭、衆議院議員(立憲政友会)を務める。大正５年(1916)没。
16	秋の七草		若杉喜三郎	№15と同名。
17	竹林夜雨		伊倉　昌三	北魚沼郡小出町大字小出島(現在の魚沼市)の人物。
18	春風	第６回美術研精会展覧会(明治41年)出品作《春風》と関連か	小川金之助	※『豪湖画譜(復刻)』に「長岡」の文字あり。
19	養老		近　　磯吉	嘉永元年(1848)生まれ。北蒲原郡築地村(現在の胎内市)の米穀商。多額納税者。近磯商店株式会社監査役を務める。長男寅一郎と次男熊次郎は、ともに土田麦僊の支援者としても知られた。
20	石山寺		山田　留蔵	
21	雨中嵐山		吉田　久平	〈十代久平〉安政２年(1855)あるいは６年(1859)、越後国蒲原郡五泉町(現在の新潟県五泉市)に生まれる。大地主にして農業を営み、多額納税者。作家坂口安吾の母アサの兄。
22	蓬莱		田村藤八郎	
23	雷声		内藤権兵衛	明治15年(1882)、新潟県に生まれる。陶器商。新潟土地温泉社長、新潟運送船会社取締役、株式会社新潟興業貯蓄銀行監査役を務める。
24	秋景山水		鷲田　種徳	石油開発者。旧金沢藩士。越後に来て滝沢安之助が創始した愛国石油鑿井会社の経営者に加わる。新津で製油所を買収し機械油を製造して利益を上げる。新津町の有力者として町政にも貢献。
25	秋夜		中山忠次郎	新潟市の商人(仲買廻船問屋業)。金丸商会を率い、新潟商品倉庫専務取締役、東洋物産株式会社専務を務める。
26	清流		上村彦之亟	嘉永２年(1849)、薩摩国鹿児島郡鹿児島城下平之町(現在の鹿児島県鹿児島市)に生まれる。海軍軍人。日清・日露戦争に出征。最終階級は海軍大将。大正５年(1916)没。
27	隠棲の月		坪井　助太	
28	青緑山水		伊東　半平	

№.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
29	蓬莱		玉川　覚平	現在の燕市で槌起銅器の伝統技術を継承する玉川堂の当主。第三代から第五代が覚平を襲名。第三代(嘉永６～大正11)はシカゴ万博、日英博覧会等で受賞。この代から玉川堂製品の皇室献上が始まる。第四代(明治14～昭和22)は海野勝珉に入門、東京美術学校を卒業。製品の近代化・多様化を図る。
30	狆		横山　芳雄	
31	月ヶ瀬		池田　常吉	明治４年(1871)、新潟県に生まれる。実業家。株式会社台湾銀行台南支店長、本店総務部秘書課長、銀券課長、大阪支店長を経て本店支配人兼庶務課長秘書課長を務める。
32	四季の山水(四幅対)		市田弥惣右衛門	
33	春暁		佐藤　　弘	
34	情温		小川四方吉	
35	清涼		桜井　市作	明治５年(1872)、蒲原郡新潟町(現在の新潟市)に生まれる。明治30年(1897)北越鉄道爆破事件の首謀者。東京物産株式会社社長、合資会社桜組社長、株式会社安造社取締役、越後鉄道株式会社取締役、新潟瓦斯株式会社取締役、新潟製菓株式会社取締役、株式会社新潟貯蓄銀行専務取締役、高田羽二重株式会社監査役、新潟織物株式会社監督等、各会社の重役を務める。新潟市会議員、新潟市参事会員、新潟商業会議所議員、政友会新潟支部長、新潟市長を務める。大正10年(1921)没。
36	鳳凰		中村半四郎	
37	艶麗		田上　直枝	
38	うらゝか		山田卯之七	
39	出山釈迦		腰越　玉吉	
40	夏の朝		山田卯之七	№38と同名。
41	金鶏遂鶩		中村　卯吉	
42	蓬莱		竹山　　屯	天保11年(1840)、越後国蒲原郡熊森村(現在の新潟県燕市)に生まれる。医学者。幕府の長崎養生所精得館に学び、越後府病院頭取、新潟病院副院長、同院長を務め、新潟医学校(現在の新潟大学医学部)の初代校長となる。新潟市の竹山病院開設者。株式会社新潟県農工銀行監査役、株式会社新潟銀行監査役を務める。大正７年(1918)没。
43	七夕		井田　長吉	
44	繊月		須田寅治郎	
45	嵐し		細矢太三郎	
46	海辺月夜		田村源治郎	
47	雪の朝		佐久間延二	
48	秋の声		栗林　貞吉	安政６年(1859)生まれ。新潟市の実業家。株式会社新潟米穀取引所理事、株式会社新潟貯蓄銀行取締役、株式会社安進社取締役、株式会社新潟銀行監査役、新潟倉庫株式会社監査役を務める。
49	遊雉	日本美術協会秋季美術展覧会(明治31年)出品作《渓間遊雉図》と関連か	高木　信吉	
50	山高日静		近藤喜兵衛	
51	上越清水越	日本美術協会秋季美術展覧会(明治30年)出品作《上越清水新道図》と関連か	佐藤八十二郎	
52	春曙		中嶋　春之	
53	墨堤の月		中島　春之	№53と同名。

No.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
54	落照		倉橋　弥平	
55	戯れる猫		飯山　勝吉	
56	山家の春		宮田　　福	
57	青嵐		清水禎三郎	新潟市の商人(廻船問屋)。清水芳蔵(第四銀行取締役)の次男、白勢春三(第四銀行専務取締役)の娘婿。新潟貯蓄銀行取締役、監査役を務める。
58	不老門		宇尾野藤八	文久２年(1862)生まれ。北蒲原郡水原町(現在の阿賀野市)の実業家。株式会社新潟銀行取締役、新発田倉庫株式会社監査役、新潟貯蓄銀行監査役、第四銀行取締役、新潟市立商業学校(現在の県立新潟商業高等学校)校長を務める。
59	初夏の雨	第７回美術研精会展覧会(明治42年)出品作《初夏の雨》と関連か	土肥　慶蔵	No.14と同名。
60	黄昏		伊倉　寛蔵	明治８年(1875)生まれ。北魚沼郡小出町大字小出島(現在の魚沼市)の経済人。幼名寛蔵。先代伊倉長三の長男で、先代の名を継ぐ。株式会社小出銀行専務取締役を務める。 ※『豪湖画譜(復刻)』に「小出伊倉新宅」の文字あり。
61	楼閣瑞祥		鈴木　梅元	
62	愁情		和田喜一郎	明治８年(1875)、蒲原郡新潟町(現在の新潟市)に生まれる。実業家、社会実業家。和田製油所を設立。和田徳伝会を創立して慈善・公益・教育事業を経営、窪田町保育園、二葉町保育園、関屋保育園、北越商業学校(現在の北越高等学校)を設立。昭和27年(1952)没。
63	樵夫観瀑		佐藤半兵衛	
64	雨中漁り		桜井　市作	No.35と同名。
65	岩淵望岳		小川　長八	
66	富士の初雪		南雲　憲義	
67	吹雪	第８回日本画会展覧会(明治38年)出品作《吹雪群鹿》と構図が一部類似	西上弥一郎	
68	蓬莱		徳永　豊吉	
69	春暖		倉橋　弥平	No.54と同名。
70 71	裏見の滝・ 華厳の滝 (双幅)		藤井与左衛門	
72	清閑		五十嵐藤三	
73	鯛		五十嵐藤三	No.72と同名。
74	狗児		藤田　繁蔵	
75	寒鴨		三浦謹之助	元治元年(1864)、陸奥国伊達郡高成田村(現在の福島県伊達市)に生まれる。医学者(内科学)。神経学を主に、生化学、寄生虫学等、多彩な研究を行う。東京帝国大学名誉教授、文化勲章受章。昭和25年(1950)没。
76	枯木立		木村　徳衛	明治４年(1871)、魚沼郡小千谷町(現在の小千谷市)に生まれる。医学博士。ドイツに留学、東京帝国大学医科大学講師、三井慈善病院内科長、泉橋慈善病院長兼理事長、常盤生命保険株式会社医務顧問、理化学興業株式会社取締役を務める。小千谷病院の発展にも尽力。昭和21年(1946)没。
77	栗鼠		清水禎三郎	No.57と同名。
78	牡丹		広瀬　善治	
79	月下		本多　幸平	
80	近江八景		近藤幸四郎	

№.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
81	鴫たつ沢		豊嶋文治郎	嘉永６年(1853)、現在の柏崎市に生まれる。南魚沼郡塩沢町(現在の南魚沼市)の縮布仲買商。株式会社六日町銀行取締役、株式会社塩沢銀行取締役、合資会社塩沢商会代表社員、上田水力電気取締役を務める。昭和６年(1931)没。
82	群鶏		小柴　文平	
83	かへり路		清水　貞作	
84	金閣寺		石崎　甚蔵	明治５年(1872)、蒲原郡新津村(現在の新潟市秋葉区)で石崎製油所を創業した石崎政五郎の子。同製油所の二代目を務める。
85	浅間山		福地　仙蔵	
86	鷹千鳥(双幅)		長尾　倉三	慶応２年(1866)、現在の愛知県に生まれる。横浜正金銀行に入社、米国・清国の各支店に在勤。台湾銀行本店支配人、斗六製糖株式会社監査役を務める。
87	赤壁		杉本元太郎	
88	日永		田中熊太郎	
89	獅子		岡田杢左工門	
90	夏の暁		清水禎三郎	№57と同名。
91	小春		阿部幸八郎	
92	柳陰牡童		大村　秀畝	
93	春晴れ		鍵富徳次郎	安政６年(1859)生まれ。新潟市の実業家。鍵富三作(初代)の次男で、鍵富財閥の中枢をなす。株式会社新潟銀行取締役、富田石油株式会社取締役、株式会社新潟貯蓄銀行監査役、新潟米穀株式取引所監査役、新潟商業会議所議員等を務める。
94	家鴨		喜多　武英	
95	嵐山		広瀬　敬吉	
96	高尾秋色		渋木　重蔵	
97	帰樵		岡崎初五郎	
98	高砂(三幅対)		阿部　　譲	明治４年(1872)魚沼郡中子新田(現在の南魚沼市)に生まれる。郡会議員、郡会議長、県会議員、中之島村長を務める。中之島信用組合を設立。昭和31年(1956)没。
99	鉢の木		鍵富岩三郎	明治２年(1869)生まれ。新潟市の実業家。鍵富三作(初代)の三男で、鍵富財閥の一人。新潟倉庫株式会社取締役、株式会社新潟貯蓄銀行取締役、新潟艀曳船株式会社取締役、鍵三合資会社理事、新潟商業会議所議員を務める。
100	観梅		吉川勝三郎	
101	鳩		清水禎三郎	№57と同名。
102	幽池		伊藤　常助	
103	舞子の浜		加藤与五郎	明治５年(1872)、愛知県碧海郡野田村(現在の刈谷市)に生まれる。化学者・工学者。東京高等工業学校、のち東京工業大学教授を務め、同名誉教授となる。工業化学分野で約300件の特許をとり、フェライトの発明でも知られる。昭和42年(1967)没。
104	句日登高		原田市次郎	
105	武陵桃源		鈴木　久蔵	明治４年(1871)生まれ。新潟市の実業家、多額納税者。株式会社第四銀行取締役、株式会社新潟貯蓄銀行取締役、イタリヤ軒株式会社取締役、新潟米穀取引所株式会社理事、新潟硫酸株式会社取締役、新潟倉庫株式会社監査役、新潟市会議員、新潟市参事会員、新潟商工会議所会頭を務める。
106	楼閣山水		室橋　荘平	
107	弥生		布施　幸蔵	

No.	作品名	出品展覧会	所蔵者名	所蔵者備考(推定される所蔵者の略歴等)
108	滝		山岸喜藤太	安政５年(1858)、越後国刈羽郡石地村(現在の新潟県柏崎市)に生まれる。実業家。山岸合名会社長、合資会社三共組理事、東西石油株式会社取締役、大阪点灯株式会社取締役、株式会社北越銀行取締役、株式会社石地銀行取締役、豊礦石油株式会社取締役を務める。大正15年(1926)没。
109	寒牡丹		樋口　金次	
110	晩帰		岡田杢左工門	No.89と同名。 ※『豪湖画譜(復刻)』に「十日町」の文字あり。
111	虎		西川　徳治	明治11年(1878)、新潟県に生まれる。石版印刷業。東京神田錦町に錦石堂を創始。
112	春景山水		宇尾野藤八	No.58と同名。
113	耶馬渓	日本美術協会美術展覧会(明治34年)出品作《耶馬渓旭橋新緑図》と別構図	渡邊福治郎	
114	親ごゝろ		高橋　　桂	
115	春情		高橋　大吉	明治11年(1878)生まれ。南魚沼郡塩沢町(現在の南魚沼市)の実業家。株式会社塩沢銀行常務取締役、塩沢町会議員、南魚沼郡富実村・塩沢村収入役を務める。
116	木枯		熊倉　福松	明治２年(1869)、現在の長岡市に生まれる。稽古町の米穀商・醤油醸造業者。長岡米穀株式取引所常務理事、北越産業無尽株式会社取締役、新潟倉庫取締役、新潟臨港株式会社監査役を務める。長岡商業会議所設立申請人。菱田春草作品の所蔵者でもあった。昭和19年(1944)没。
117	初夏の滝		西田直治郎	
118	宿鷺		山田　留蔵	
119	小松原		加藤　富弥	
120	秋の夕	第５回美術研精会展覧会(明治39年)	木下　正中	明治２年(1869)、福井県に生まれる。産婦人科学者。ドイツに留学、東京帝国大学医科大学産科学婦人科学教授を務める。本郷森川町に居住。昭和27年(1952)没。